

# H. D. マクラウドの信用理論と 近代的信用観の形成

二 階 堂 達 郎

はじめに

シュムペーターはその著書『経済分析の歴史』の中で1844年の銀行条令の成立過程において燃え盛った通貨学派と銀行学派との論争を顧みて、それは地金論争とは異なって「光よりもむしろ熱を余計に生んだものであった<sup>1)</sup>」と述べている。実際、かれが指摘するように両者の立場にはきわだった相違点がなく、自由放任、金本位および金の自由移動による外国為替の自動的規則を支持するなど、技術的性質を帯びたものを除けばむしろ共通点が目立っていた<sup>2)</sup>。だが、貨幣ないしは通貨の性格や通貨管理の可否をめぐるなされたこの論争の背後には、産業化にともなう通貨・信用制度の近代化の前提として解決されるべき基本的な課題が存在していたことも否めない。論争は、十分な理論的成果をえられないままに一部の問題を除いて19世紀の後半には下火に向かい、論争点は理論的決着を十分につけられないままに制度と政策の現実的な展開が先行していったのである。貨幣や信用に関する理論にその現実が投影され、近代的なものへの移行が始まるのは19世紀も末になってからである。その移行は従来の視点の質的な転換をとともなうものであり、通貨論争点にも内包されていた信用の問題についても例外ではない。信用理論における転換は、はじめて「グレシャムの法則」を唱えたことで知られているスコットランド出身の経済学者 H. D. マクラウド (Henry Dunning Macleod, 1821-1902) によるところが大きかった。

しかし、かれの議論は必ずしも経済学者たちに順調に受け入れられたとはいえない。シュムペーターは次のように述べている。「銀行信用の事実的に的確にあてはまるような体系的な理論を作りだそうとしたマクラウドによって試みられた最初の——必ずしも全面的には成功しなかった——企ては、ほとんど注目されず、ことに好意ある注目をひくことはいっそうわずかであったのである」。「マクラウドは、多くの功績をもつ経済学者の一人であったが、自分の多数のよい考え方を経済専門家に受け入れられやすい形で示す

ことができなかったので、他人の認知を受けることも、あるいはまったく真面目に受け取られることもできなかった。私のこの書物においては、かれの三つの公刊書を挙げる以外には、かれに対する何の埋め合せもできない。この三書によってかれはここで討議している主題の近代理論の基礎を据えたが、しかししばらくの間は、こうすることによって真にかれの得たところは、逆にこの理論の信用を喪ったということであった<sup>3)</sup>。確かにその原因の一端はマクラウド自身の信用理論の展開の仕方にもあったように思われる。上記の三冊の著作とは、信用論に関連する主要著作である『銀行業の理論と実際』、『信用および銀行業に関する講義』<sup>5)</sup>、『信用の理論』<sup>6)</sup>を指しているが、いずれも信用の法的・史的展開の記述に多くを割いたいささか散漫な叙述が目立ち、シュムペーターの記述を首肯しうるものになっている。

しかしもうひとつの原因として、シュムペーターも指摘するように英国においては「商業信用」説の影響が伝統的に強かったことがあげられるであろう。「信用と銀行業務のアカデミックな分析……は、先行期間から受け継がれてきた考えの蓄積に立って進められ、疑いもなくこれを洗練し明瞭化しかつ発展せしめたが、しかし新鮮なものの多くを付け加えることがなかった。実質上これは銀行業務の商業説が行き渡っているのを意味するものであった。すなわち、商業手形ないしは、いささか一般的に言えば、その時々の商品取引の融資をもって銀行信用の柱石となした説である。われわれはもちろんかかる状況の由来をトゥックとフラートンに遡らすであろう<sup>7)</sup>」。

今日では、マクラウドは「信用創造論」をはじめて体系的に論じた経済学者として知られている。しかし、かれが銀行の本質を信用の創造であると規定し、そのメカニズムを明らかにすることができたのは、信用に関する新たな観念の形成がその前提としてあったことを見逃してはならない。かれは、弁護士として銀行の訴訟事件にかかわったり、為替手形や銀行券に関する法規類纂の作成に携わるなど、信用の法律的側面にきわめて明かかった。その信用理論における貢献は経済的現象に法的側面から考察を加えることによってなされたのである。この論文はかれが「信用創造論」を創出するにあたってその基礎となった信用概念について論じたものである。ここでの議論は、信用や銀行業に関する著作の内容を集大成した1894年出版の『信用の理論』の第2版に基づいているが、その信用概念の基本的な内容は1855-6年に出版された『銀行業の理論と実際』にすでに含まれていることを指摘しておかねばならないであろう。

## 1. 「信用の貨幣理論」から「貨幣の信用理論」へ

貨幣や信用について論じる場合、支払や貸付のみが存在する状態の分析から始め、次第に貨幣に対する請求権や信用手段を導入していく手法をとることが多い。信用の概念

や制度は、貨幣の成立を前提としてその延長上に展開されるという暗黙の前提が存在しているように思われる。たとえばヒルデブランド (Bruno Hildebrand, 1812-1878) は、生産や消費を媒介する流通手段の展開という観点から経済の発展段階を「現物経済」、「貨幣経済」、「信用経済」という三つの段階に区分したが、この見方はその典型であるといえよう。

シュムペーターは『経済分析の歴史』の中の信用理論に関連する部分で、こうした見方に対して興味ある指摘を行なっている。資本主義経済における論理的な分析を行なう場合にはこの議論の展開を逆転させた方が有効であるというのである。つまり、「まず最初にこれらの信用取引から出発して、資本主義金融をもって、債権債務を相殺しその差額を繰り越してゆく手段決済制度とみる——したがって『貨幣』による支払は、ひとつの特殊な場合にすぎず、なんら特別の基本的重要性をもつものでなくなる——のが、もっとも有効な方法であるかもしれない<sup>8)</sup>」というのである。

シュムペーターは、前者の見地を「信用の貨幣理論 (Monetary Theory of Credit)」、後者を「貨幣の信用理論 (Credit Theory of Money)」と称した上で、英国における通貨論争について次のように述べている。「ソートンからミルにいたるイギリスの指導者たちは、信用構造の探索をなしたし、またこれによって、貨幣分析に対するかれらの主要な貢献となつてはいるが、しかし信用の貨幣理論のタームをもってしては適切に述べえられなかった発見をなしたのである。ところがかれらは、これらの発見の理論的な意味内容の完成、すなわち体系的な貨幣の信用理論の構築をなすことができなくて、原理的には依然として信用の貨幣理論に膠着して<sup>9)</sup>いた」。

この「信用の貨幣理論」から「貨幣の信用理論」への転回こそ、マクラウドがその信用理論によって成し遂げたものである。<sup>10)</sup>シュムペーターによれば、「信用構造に関する役に立つ理論、ことに物価と利子との関係の発見」に至る上で「信用の貨幣理論」自体が妨げとなっていたのである。なぜならば、それは「網のように広まった信用『支払』の組織の理論を正金支払の場合から展開しつつ、法貨たる貨幣に論理的に優先的な地位を許容するものだからである<sup>11)</sup>」。

マクラウドは、信用を貨幣から派生したものとしてみる通常の見解とは反対に、信用こそが論理的にも歴史的にも本源的な存在とする。すなわち、取引（物々交換ないしはバーター）が不等価である場合には、その取引は信用を媒介として行なわれるのが常態であったのであり、貨幣はかかる取引に随伴する負債（収支の差額に対する請求の権利）を表示し、指図し、支払を約束・保証する手段のひとつとして生成したにすぎないとい<sup>12)</sup>うのである。

こうした信用による取引を基本的で本源的な形態とみなすマクラウドの議論はハーン (Albert Hahn, 1889-1968) の「無現金経済 (Bargeldlose Wirtschaft)」の概念の先駆

をなすものであり、また貨幣を負担する請求権とする見地はベンディクセン (Friedrich Bendixen, 1864-1920) やエルスター (Karl Elster, 生没年不詳) が唱えた貨幣の指図証説の先例をなすものといえよう。

## 2. 「抽象的権利」としての信用

マクラウドは、交易をその対象の性質に応じて「有形物 (Material Things)」、才能・労働能力・信用力などの「人的能力 (Personal Qualities)」、「抽象的権利 (Abstract Rights)」という三種類の経済量の間の交換から成り立つとする<sup>13)</sup>。「抽象的権利」とは、債権などの請求権のほか、事業の営業権 (Goodwill)、著作権、特許権などの権利から構成されるとしている。かれも指摘するように、スミスからミル、セーに至る古典派経済学者は一般に、「有形財 (Material Commodities)」および労働や人的特性を経済的な取引の対象としてとらえていたものの「抽象的権利」の取引については議論を展開することはなかった。マクラウドの信用理論の根幹をなすのは、経済取引の対象に「抽象的権利」を含め、しかもそれを高度な経済社会における取引の本質的な要素とみなしたことである。かかる「抽象的権利」の取引が一般化するためには、所有の形態と様式が多様化することが前提となるのであり、そしてその意義と機能が解明されるためには所有や「権利」という概念に対する法的側面からの考察なしにはなしえなかったのである。

マクラウドは所有権をその対象と様式に応じて「有体または有形所有権 (Corporeal or Material Property)」、「無形所有権 (Immaterial Property)」、「無体所有権 (Incorporeal Property)」の三つに区分している<sup>14)</sup>。「有形 (有体) 所有権」とはいわゆる「物権 (Real Rights)」のうち有体物 (動産・不動産) を「支配する権利」であり、その権利の適用には本来的に排他性が存在する。つまり、同一内容の権利は同一物に並存できず、権利と特定の物体とは分離できないために別々に独立して売却されえない。また、「無形所有権」とは「抽象的権利」の対象のうち営業権、著作権、特許権といった知的創作物や営業上の信用などの無形物を「支配する権利」であり、広い意味での「物権」に含まれる。これに対してマクラウドのいう「無体所有権」とは、債権に代表されるような、ある者が他のある者に対して一定の行動を「請求する権利」を意味する<sup>15)</sup>。この場合には権利は特定の物体と切断され、物体と別々に独立して売却されうる。「有形所有権」および「無形所有権」は「物に対する権利」であるのに対して、「無体所有権」は「人に対する権利」である。なお、金属貨幣や商品性を帯びた貨幣はすべて有形物に含まれるが、それらに対する請求権すなわち債権は「無体所有権」に属する。また、証券のうちでも船荷証券、倉庫証券、ドック証券 (Dock Warrants) <sup>16)</sup>などは前者に属し、銀行券、小切手、為替手形などは後者に属する。

マクラウドによれば古典派経済学者が誤った信用観に支配されているのは、まさにかかる法的認識を欠落させているがゆえなのである。すなわち、信用または債権（債務）とは債務者が債権者に必ず貨幣を支払うという約束であり、債権者が債務者に対して支払いなどの一定の行動を請求するという「人に対する権利」あるいは人の「行為についての権利（Rights of Action）」であるという点を見逃しているためなのである。そして、このことすなわち貸与された現存する一定額の貨幣を支配する権利ではなく「行為についての権利」であるということが、信用に未来の価値に対する請求権としての性格とその権利の「創造」の可能性を与えているのである。「もし、商人がその名のとおりよい『信用』を享受しているならば、市場に出向き、貨幣ではなく、将来に貨幣を支払うという約束によって財を買う。すなわち、かれは行為についての権利を自らに対して創造するのである。その財はまさに貨幣で支払ったかのように、かれの財産になる。それは売買あるいは交換である。行為についての権利は財に払う価格である。それは信用……と名づけられる。なぜならそれは何か特定の額の貨幣に対する権利ではなくて、その商人から将来ある額の貨幣を請求するという行為の権利にすぎないからである<sup>17)</sup>」。

周知のとおり所有概念には二つの主要な流れ、すなわちローマ法に由来するシヴィル・ローマ体系と、英国の独自の社会的・政治的環境から発達したコモン・ロー体系が存在する。ローマ法の所有概念の基本的な特徴は、所有の対象を動産や不動産からなる有形物に限定していることと、所有権の性質をそのものの保有による成果の享受から処分までを含む包括的で排他的なものとして規定していることにある。所有様式の多様化に顕著な役割を果たしたのはイギリスで発達した封建的な土地所有制度、およびそれに源泉をもつコモン・ロー体系であったとしばしば指摘される。しかしながら「無体所有権」については、ローマ法の下においても、商業が発展する中で所有権の対象が無形物に拡大される過程と併行してローマ時代の後期ですでに認められていたとマクラウドは述べている<sup>18)</sup>。

### 3. 「カレンシー」の概念

信用が経済的取引においてどれだけ重要な意義を獲得するかどうかは、債権など「無体所有権」が「譲渡性（Negotiability）」すなわち「通用性（Currency）」をどれほど獲得するかどうかにかかっていた。マクラウドは、この「権利」が流通手段として発展する過程を考証し、近代的な信用概念と銀行業の形成やその本質を明らかにしようとした。

現在の経済学において「カレンシー」は、主に機能的な側面から把握され、中央銀行券や鋳貨から預金通貨までを含む流通機能を果たす広範な手段を示す用語として定着しているように思える。管理通貨制度の成立の結果、金本位制度の下で本来の「貨幣」す

なわち正貨が明確に有していた定義は曖昧となり、他方、信用制度の発展による信用貨幣の普及の結果、「カレンシー」すなわち「通貨」なる概念が「貨幣」の概念をも包み込んでしまったかのようである。しかし他方では、「通貨」を「貨幣」の一部の機能を代替する代用物として漠然と理解されてもいるようである。この認識は古典派経済学を通じて受け継がれてきた。よく知られているように、A. スミスは「金・銀貨幣の代わりに紙幣 (Paper Money) を代用するのは、商業のきわめて高価な用具を、はるかに経費がかからず、しかも同等に便利な用具で置き換えることである<sup>19)</sup>」と述べているし、J. S. ミルも「貨幣の代用物としての信用<sup>20)</sup>」を前提に議論している<sup>21)</sup>。このような貨幣や通貨の定義をめぐる曖昧模糊とした状態の一因は、シュムペーターのいう「信用の貨幣理論」から「貨幣の信用理論」への転回が十分に経られないままに今日に至っていることにもあるようだ。

マクラウドはこの「カレンシー」を法的概念とみなし、他方それと対応する経済学的な用語として「流通媒介物 (Circulating Medium)」を区別して用いている。そして、この「カレンシー」すなわち「通用性」を有しているものはすべて「通貨」であるとしている。ところで、この「通貨」には大きく分けて二種類の系譜があることは容易に理解されよう。金属貨幣はある特定の「商品」が一般的に受容されるようになって「通用性」を獲得することにより「通貨」になったとみなされるが、これに対して銀行券・小切手・為替手形などの債権は「無体所有権」が「通用性」を獲得することによって、それぞれ「通貨」になったとみなされる。後者が「通用性」を獲得して「通貨」になるためには「権利」が「譲渡性」を獲得するということが前提になる。マクラウドは債権がこの「譲渡性」を獲得していく過程をローマ法 (シヴィル・ロー)、コモン・ローおよび衡平法の規定や判例に基づき詳しく考察している<sup>23)</sup>。

ローマ法の下では所有権は原則として絶対的支配権を意味していたことや、その政治形態の下では市民間に平等の関係が維持されていたことから、市民間の債権債務の契約の形成や移転はそれほど頻繁に行なわれていなかった。実際にその初期の厳格な法によれば、「無体動産」すなわち債権 (負債) は財産の一部として認められていたけれども、原則として非譲渡的であった。このため初期のローマ法では債権の譲渡は新たに契約を結び直すこととみなされ、当事者や第三者の立ち合いの下に厳格な手続きを経て行なわれていた。ローマ人がブリタニアから去ったときにイングランドに残されてコモン・ローに引き継がれたのは、かかるローマの古典期の法の内容であったとマクラウドは述べている<sup>24)</sup>。つまり、ローマ古典期の法もイングランドのコモン・ローも元来、債務者の同意がなければ債権は移転できなかったのである。

しかし、ローマ法ではやがて債権者が債務者の同意なしに債権を自由に移転することを認めるようになる<sup>25)</sup>。そして、ビザンティン帝国において編纂されたユスティニアヌス

法典およびバシリカ法典では債権は貨幣や他の財のように自由に販売可能であることが宣言されたのである。<sup>26)</sup> シヴィル・ローの方が債権の「譲渡性」をコモン・ローよりも早くからしかもより明確に認めていたのである。イングランドにおいては衡平法によって、債務者自身によって譲渡可能なものとして作り出された負債は譲渡しうるとし、また債権の譲受人が譲渡人の代理つまり委託者として訴訟できる道を開くことによって負債の移転が事実上認められるようになった。<sup>27)</sup> このように衡平法の立場はユスティニアヌス法典およびバシリカ法典と基本的に同じものであったが、その衡平法の原理が正式にコモン・ローに取り入れられることになったのは（1873年の最高法院条令に基づいて）ようやく1875年になってからである。ただし当然のことではあるが、封建制の下では土地の支配権は国の代表として国王に所属し、絶対的な所有権は個人には認められず、また土地を中心としてこの社会はピラミッド状に重なり合った契約の体系から成り立っていたため、財産の譲渡のみならず債権についても「譲渡性」が一時的に後退するのは避けられなかった。

こうして、譲渡人は債務者の同意がなくても債権を譲受人に売却でき、新たな債権者に債務者からの支払を受けることができるようになったのであるが、債権・負債が「譲渡性」を拡大する過程がいかなる状態で進行したかについては、債権・負債に対する債権者と債務者の利害が異なっていることが大きな影響を及ぼした。債務者が負債を移転する場合は、債権者の利害にかかわる債務者の支払い能力の変更をとまなうために一般に債権者の同意が不可欠であるが、債権者がその保有する債権を移転する場合は債務者の利害にはとくに問題が発生しない。「商業信用」はかかる基礎の上に発展していったものといえる。しかしながら、かかる段階の信用は商業や産業の発展にとって依然として制約を有していたことは否定できない。債権の「譲渡性」のいっそう拡大にとって課題であったのは、債務者の信用の確実性とその保証であった。その制約を打破したのが、強固な信用（信頼）を有する者が債務者として現われ、自らの負債を引き受けることであった。銀行はこの債務者の役割を、貨幣とまったく変わらない移転の機能——持参人払いや指図に応じて支払うなど——を自らの負債に付与するという特別な便宜を顧客に与えることによって引き受けたのである。<sup>28)</sup> このようにして銀行は債権者の不安や不利益を大いに減少させることに成功したのである。銀行が発行する信用はその「譲渡性」をいっそう拡大し、「取引可能な負債」すなわち通貨または流通媒介物として貨幣と同様に自由に移転することができるようになり、その結果「銀行信用」すなわち信用の大量生産のための条件のひとつが築かれることになったのである。

もうひとつ指摘されねばならないのは金銭的債務の消滅という意味での負債の決済についてである。<sup>29)</sup> この決済には、「免除（Acceptilation, Release）」、「弁済」（貨幣による支払）、「更改（Novation）」、「相殺（Compensation, Set-off）」などの方法があるが、現

代においてはそのほとんどが貨幣ではなくて信用によってすなわち負債の「相殺」によって債務の解消がなされ、取引が行なわれている。確かに貨幣による支払いは絶対的な債務の履行および取引の終結であり、法貨の場合は法的にそれが保証されている。この意味で信用とは「貨幣と同じ性質をもっているが下位の序列にある」ということになる。<sup>30)</sup>しかしながら、商取引の拡大は、負債に明示された請求の対象そのものによる弁済ではなく、本来ならば付随的である手段によって決済がなされることを定着させたのである。たとえば「相殺」は、銀行券（または貨幣）同士の間、貨幣と手形の間および手形同士で行なわれるが、その各々が決済をとまなう取引として行なわれるのであり、それは、為替手形の圧倒的な部分が決済を行なうものとして受け取られ、流通しているのをみれば明らかである。また、負債が証券の形式をとるかどうかは本質的なことではない。帳簿上の負債である「銀行貸方 (Bank Credits)」すなわち預金も同等の決済能力と流通能力を有しており、通貨である。<sup>31)</sup>信用による取引はけっして「未完」の取引ではなく、それぞれが貨幣と同じ資格をもって決済される独立し「完結」した取引として認識されねばならないのである。この実態を無視することは、債務の移転が経済活動に果たしている役割の意義と重要性をみないことを意味することになろう。そして、このように負債が事実上貨幣と変わらない決済性を有し、その流通や交換がそれぞれ独立し完結した取引であるということについて、19世紀までの経済学者は必ずしも明白に認識していたとはいえない。たとえばJ. S. ミルは信用をたんに貨幣の使用を「節減」する手段としか考えていなかったし、<sup>32)</sup>マルクスの場合は信用の連鎖の切断と現金による決済の不可避性を強調しさえしていたのである。<sup>33)</sup>

#### 4. 信用の創造

コモン・ローの下で生成した所有概念によって、所有は現在では権利の「束」——所有物を使用し、それから得られた収益を手に入れ、所有物を自由に処分しうるといった権利の複合体——として理解されている。<sup>34)</sup>所有の多様化の代表的な事例として株式会社にみられる所有権と支配権の分離や「信託」の概念がよく取り上げられる。信用の近代的観念もかかる所有概念の多様化あるいは階層化と密接なかかわりをもっているものの、他方で独自の性質を有していることに注意すべきであろう。

マクラウドは債務関係の一部をなす「貸与 (Loan)」には二つの種類があり、それを明確に区別する必要を強調している。<sup>35)</sup>ひとつは占有（使用）権だけが一定時間借手に与えられ、所有権は貸手に残る場合であり、もうひとつは所有権が借手に与えられ、貸与物に等価物を要求する権利を貸手が得る場合である。物の貸与は前者に、そして貨幣の貸付や請求権の保持はすべて後者に該当することはいうまでもない。前者の場合には物の

使用によってその効用が享受されるだけにすぎないが、後者の場合には、要求払いあるいは将来の支払いの約束を与えるという条件、すなわち貸与された額の貨幣を実質的に自由に使用することを認めるという条件を借手である銀行が与えることによって、貸手と借手の双方がそれぞれの貸与された額に等しい購買力の自由な使用权（所有権）を手に入れることができるのである。こうして、物の貸与の場合には財産の創造や売買・交換はないのに対して、貨幣の貸付の場合には財産の新たな創出、すなわち信用や負債の新たな創出が果たされ、またそれらの売買や交換が可能となるのである。このようにして「無体所有権」の貸与が「無からの創造」を可能にする鍵となるのである。<sup>36)</sup>

この現象は、シュムペーターのことは借りれば次のように表現されよう。「一般に財貨に対する請求権をこの財貨と並ぶ独立のものとみなすことはできない——ちょうど穀穂と穀粒とが等しくないのと同じである。しかし本文における事態は明らかにいささか異なったものである。すなわち、私は馬に対する請求権の上に乗って駆けることはできないが、しかし私は、事情によっては、貨幣に対する請求権によって貨幣それ自身によるのとまったく同じことをすることができる。すなわち物を購入することができる」のである。そしてマクラウドは、銀行業の本質的な機能はかかる信用の「創造」にあることをはじめて明確な形で提示したのである。その「創造」は、貨幣と交換に信用を販売することによってではなく、その信用を超える信用を創造・発行することによって、いいかえれば負債による負債の購入すなわち負債の売買によってはじめて果たされるのである。それゆえ、「銀行とは、将来に支払われる貨幣・信用・負債または行為についての権利を、要求払いの信用・負債または行為についての権利を創造することによって販売する取引業者」<sup>38)</sup>であり、「信用の販売店舗（A Shop for the Sale of Credit）」<sup>39)</sup>なのである。また、その利潤も信用の発行と創造から生じ、その大きさは銀行が「自らの信用で購入できる負債の量」<sup>40)</sup>すなわち「創造された信用の総量に対する貨幣支払い要求の比率」<sup>41)</sup>によって決定される。信用制度によって「所与の金の基礎の上に、その額の何倍もの信用の上部構造」<sup>42)</sup>が築かれ、その上部構造の大きさはその組織の完全性に依存するというメカニズムが明らかにされたのである。

マクラウドによるもうひとつの功績として、信用へ時間概念を導入したことが挙げられる。かれは、信用がけっして貸与された現存する一定額の貨幣を支配する権利ではなく、将来において一定額の貨幣の支払いを請求する権利であると繰り返し強調している。つまり、信用とは「将来収益に対する現在の権利」<sup>43)</sup>であり、それによって「(期待される)将来収益の現在価値」<sup>44)</sup>が交易に導入されるとするのである。ここに信用が「無」から「創造」される根拠が存在しているのであり、これは当時の多くの経済学者たちに欠落した観点でもあった。たとえば、J. S. ミルにとっても信用が「無からの創造」であるとは理解しがたいことであった。かれは「信用の拡張は、資本の創造に等しいものであるとい

われ、あるいはあたかも信用は実際に資本であるかのようにいわれることの、何と多いことであろう。大体、信用は他人の資本を使用することに対する許可にすぎないものであるから、その信用によって生産手段が増加するはずはなく、ただそれが移転されるにすぎないのである<sup>45)</sup>と「信用創造」説に対する批判を行なっている。ここでミルによって見逃されているのは、信用によって遂行されるのは現存する資本の移転ではなくて、資本による新たな富の創造であるということである。「信用創造」を認めるか否かは、時間概念に基づいて信用を理解しうるかどうかとかかわっているのであるが、さらにその根底には、信用を「行為についての権利」として把握し、「無体所有権」を取引の対象としてとらえる視点が確立しているか否かにかかわっているのである。

近代信用制度は、債権・負債を「通貨」へ転化させ、「信用創造」の途を開き、さらには「通貨」を金という物的な制約から解放することによって、産業の発展に必要な資本を豊富に供給する途を開くことになったのであるが、その過程は信用観における転換を必然的にともなうものであった。その転換には所有権の多様化や「譲渡性」の拡大という法的な観念に対する理解が不可欠であったのであり、すでに指摘したように、このことが信用の近代的な意味を経済学者にとって理解を困難にした一因であった。実際、1930年になってもケインズが預金による信用創造の意義について『貨幣論』で詳細に述べたのは必要かつ適切なことであったと、シュムペーターは述懐している<sup>46)</sup>。マクラウドの信用論の最大の意義は、経済学と法学が交わる領域に分け入って古典派と決別する信用観念の礎を据えるとともに、預金通貨や信用創造の意義と役割の指摘をはじめ、信用への時間概念の導入を通して、のちにオーストラリア学派によって本格的に展開される「資本利子」論の先鞭をつけるなど、近代的な信用理論の確立にとって不可欠な諸要素を提示したところにあるといえよう。

## 註

- 1) Joseph Alois Schumpeter, *History of Economic Analysis*, edited from Manuscript by Elizabeth Boody Schumpeter, New York, Oxford University Press, 1954, p. 718, 東畑精一訳『経済分析の歴史』岩波書店、1955年、1505-6ページ。
- 2) Ibid., p. 727, 同上邦訳書、1524ページ。
- 3) Ibid., pp. 1115-6, 同上邦訳書、2347-8ページ。
- 4) *Theory and Practice of Banking*, 1st ed., 1855-6, 奥田勲訳『銀行概論』内外出版、1923年。
- 5) *Lectures on Credit and Banking*, 1822.
- 6) *The Theory of Credit*, 1st ed., 1889-91, 2nd ed., 1894.
- 7) Schumpeter, op. cit., p. 1111, 前掲邦訳書、2340ページ。
- 8) Ibid., p. 717, 同上邦訳書、1504ページ。
- 9) Ibid., p. 718, 同上邦訳書、1504-5ページ。
- 10) シュムペーターは歴史的にも論理的にも「信用の貨幣理論」よりも「貨幣の信用理論」の

- 方が好ましいとしている。Ibid., p. 717, 同上邦訳書、1504ページ。なお、かれは『貨幣および信用理論の歴史』(*Histoire des Doctrines relatives au Crédit et à la Monnaie, depuis John Law jusqu'à nos jours*, 1938, 天沼紳一郎訳『貨幣信用学説史』実業之日本社、1943年)の著者として知られているシャルル・リスト(Charles Rist, 1874-1955)を「信用の貨幣理論の強力な信奉者たる傑出した批評家」と評している。Ibid., pp. 718, 1117, 同上邦訳書、1505, 2351ページ。
- 11) Schumpeter, op. cit., p. 719, 前掲邦訳書、1506-7ページ。
  - 12) マクラウドは、貨幣を信用の最も高度で一般的な(法貨としては法的強制力を有した)形態あるいは「普遍的に交換可能な商品(Universally Exchangeable Merchandise)」と認めるが、貨幣にとって素材はなんら本質的な要素ではないとする。かれの価値論は当然のこととして主観的な名目価値説に属するが、さらに徹底した相対主義の立場をとっており、価値標準や価値尺度の概念をも一切否定している。Macleod, *The Theory of Credit*, 2nd ed., 1894, pp. 74, 90.
  - 13) Ibid., p. 31. マクラウドは経済学を「交換の科学」と規定し、交換過程を分析の中心的対象に据えている。この立場は、他の主張——交換の対象にサービスや権利を含めたり、「貸金基金説」に反駁したり、あるいは主観的な名目価値説を展開していることなど——と併せて、かれの古典派への批判的な態度を明瞭に示すものとなっている。
  - 14) Ibid., p. 46.
  - 15) マクラウド自身は「無体所有権」を「ある特定の『物体(*corpus*)』あるいは占有物から完全に分離された所有権または権利」と規定しているが、実際になされている説明は請求権に関するものである。Ibid., pp. 45-6.
  - 16) 倉庫証券の一種である。
  - 17) Ibid., p. 15.
  - 18) 貨幣は、その一般的な「受容性」や「通用性」の基礎をなす抽象的性格のため本来的に物権の対象になりえないし、法貨としてはさらに公共的性格がつけ加わるためにやはり物権の対象になりえない。それゆえその貸借はマクラウドのいう「無体所有権」の対象にはじめから属することになるのである。
  - 19) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, ed. by Edwin Cannan, 1950, pp. 275-6, 大内兵衛、松川七郎訳『諸国民の富(2)』岩波文庫、1959年、262ページ。なお、この場合の「紙幣」とは政府紙幣や銀行「約束手形」を意味している。
  - 20) John Stuart Mill, *Principles of Political Economy with Some of Their Applications to Social Philosophy*, 7th ed., 1871 (1st ed., 1848), p. 527, 末永茂喜訳『経済学原理(3)』岩波文庫、1959年、150ページ。
  - 21) ソートンの業績や通貨論争は、この貨幣の「代用物」の対象範囲を漸次的に拡大してきたものとみなすこともできる。
  - 22) Macleod, op. cit., pp. 102-8. マクラウドは、この「流通媒介物」という用語は1797年の銀行制限条令に関する論争ではじめて使用されたとしている。なお、スミスは貨幣や紙幣が有する流通手段としての能力として「カレンシー」を用いている。Smith, op. cit., p. 276, 前掲邦訳書、263ページ。
  - 23) 負債の移転に関するローマ法の決定ならびにその変遷については Macleod, op. cit., pp. 276-83 を、英国のコモン・ローおよび衡平法の決定とその変遷については pp. 283-314 を参照のこと。
  - 24) マクラウドは皇帝アントニヌスの時代のガイウス(Gaius, 110 頃-180 頃)による法としている。Ibid., p. 279.

- 25) マクラウドは皇帝セウェルス・アレクサンデルの時代(222-235)であるとしている。Ibid., p. 279.
- 26) マクラウドは為替手形の形式の相違をイングランドとスコットランドのコモン・ローの起源の相違と関連させて述べている。いずれにおいても債務者はかれの債権者によってかれ宛てに振り出された手形を受け入れることを義務づけられているが、イングランドでは「譲渡性」に関する記載が為替手形の書面上に記載されているのに対して、スコットランドではその記載が為替手形の書面上にない。この相違の理由は、イングランドのコモン・ローがローマ古典期の法に基づいていたのに対して、中世以来フランスを通して大陸法の影響を強く受けたスコットランドにおいてはコモン・ローはユスティニアヌス法典およびバシリカ法典に基づいていたことによる。現在(19世期末)では衡平法が採用された結果、為替手形は「譲渡性」について言及されていないにもかかわらず譲渡しうようになり、この相違は消滅した。Ibid., pp. 282-3 を参照のこと。なお、ユスティニアヌス法典はユスティニアヌス1世(在位527-565)によって集大成され、制定、発布された法律と法学説を総称したものであるが、基本的な内容は9世紀に成立したバシリカ法典に継承され、中世のヨーロッパ大陸に大きな影響を与えたとされている。
- 27) マクラウドはヘンリー4世の頃としている。Ibid., p. 284.
- 28) Ibid., pp. 595-7.
- 29) 債務の解消に関しては Ibid., pp. 318-34 を参照のこと。
- 30) Ibid., p. 334.
- 31) 預金通貨に関しては Ibid., pp. 591-94, 597-602, 869-76 を参照のこと。
- 32) Mill, op. cit., 第3篇 第11章 第3節 第6節を参照のこと。
- 33) Karl Marx, *Karl Marx - Friedrich Engels Werke*, Bd. 25, 大内兵衛、細川嘉六訳『マルクス＝エンゲルス全集(25-A)』大月書店、1966年、第3部 第5篇 第25章を参照のこと。
- 34) マクラウドは「占有の権利」、「使用の権利」、「成果や利潤を専有する権利」、「譲渡し破壊する権利」および「取り戻す権利」に分類している。Macleod, op. cit., p. 37.
- 35) Ibid., p. 149.
- 36) 信用または負債の創造は二人の人物の合意、つまり「第三の富」である「人間の意思(Human Will)」を源泉とする富であるとマクラウドは表現している。Ibid., p. 62.
- 37) Schumpeter, *Theorie der Wirtschaftlichen Entwicklung*, 2 Aufl., 1926 (1 Aufl., 1912), S. 142, 塩野谷祐一、中山伊知郎、東畑精一訳『経済発展の理論(上)』岩波文庫、1977年、256ページ。
- 38) Macleod, op. cit., p. 585.
- 39) Ibid., p. 606. マクラウドは銀行を貨幣取引業者や、貸手と借手の仲介者であるとしたり、その利潤は貸借利子の差額から生じるとみなす通説の批判を展開している。Ibid., p. 607.
- 40) Ibid., p. 608.
- 41) Ibid., p. 606.
- 42) Ibid., p. 647.
- 43) Ibid., p. 88.
- 44) Ibid., pp. 88, 617.
- 45) Mill, op. cit., p. 527, 前掲邦訳書、150-1ページ。またミルは、信用の意義について「信用はある人の手から他の人の手への資本の移転にすぎないけれども、それは、一般に、かつ当然に、資本を生産に有効に使用するより大なる能力をもった人の手への移転である」ということに見出している。Ibid., p. 528, 同上邦訳書、152-3ページ。
- 46) シュムペーターは、流動性選好説は「信用創造」の観点の後退を意味するとして次のよう

にその問題点を述べている。「預金を創造する銀行貸付と、かように貸し付けられる金額がそれ以前に貯蓄されることなくして資本投下の融資において演ずる役割とは、1936年の『一般理論』の分析的図式においてはほとんど消え去ってしまい、舞台を支配するのが再び公衆の貯蓄となっている。オーソドックスのケインズ学説は事実旧き見解に立ち戻るものであって、これによれば、貨幣市場の中心的事実は、世人の貯蓄性向に加えるの流動性選好をもってして分析的に伝えられるとなされているにいたった」。そして「古い理論」とは、「預金者自らが貯蓄せずまたそうする意思をもっていないときにも、かれらをもって貯蓄者なりと理解せしめるものである。これはかれらが実はもっていない『信用供給』への影響を、かれらに帰属せしめるものにほかならない」。Schumpeter, *History of Economic Analysis*, pp. 1114-5, 邦訳書、2345-7ページ。

(平成 5 年 9 月30日 脱稿)